

## CJ パートのたたき台（知財計画 2022）

## [タイトル] 『アフターコロナを見据えたクールジャパンの再起動』

## (前文)

- 知財計画 2021（CJ 戦略の再構築等）の振り返り
- 新型コロナによる影響等
  - ・ワクチンの接種が進んだ一方、オミクロン株等が流行し、終息がまだ見えない
- ⇒引き続き、CJ 関連分野の存続を図ることが重要
- 昨年夏、様々な制約がある中、東京オリンピック・パラリンピックを成功裏に開催
- ⇒オリパラのレガシーを活かしてクールジャパンの更なる進化を

## (1) 再構築された CJ 戦略を CJ 関係者の間で実装していく（総論）

- 知財計画 2021 では、CJ 戦略の再構築(コロナ後の CJ の姿)を提示
- 今回の知財計画では、CJ 関係者において再構築の考えを実装すること（＝再起動）の重要性を示した上で、3 つの具体的な手法を提示

## (2) クールジャパン戦略の再起動のための 3 つの手法（各論）

その 1 サステナブル（SDGs）の視点での磨き上げ

- 世界的にサステナブル（SDGs）を重視する考え方が主流に
  - ・特に Z 世代では、サステナブルを重視する割合が高い
- 日本の文化や生活様式には、サステナブルの考えと親和性があるものが多い
  - ・例：もったいない等の生活の知恵、豊かな自然、三方よし、老舗 等
  - ・一方、日本の取組が遅れていると国際社会から厳しい視線がある
  - ・日本での日々の生活が「クール」と言う外国人が多い。テレワークによる地方移住が普及した今、豊かな環境の下での日常生活の価値を再認識することは、サステナブルに通じる

- 日本の魅力や素晴らしさを自覚し、これを活かしながら、世界の人々と共に未来を切り拓いていくチャンス
- 各C J関係者には、自らの価値をサステナブルの視点から見つめ直すとともに、外国人に受け入れられやすい「ストーリー」として再編集することを期待

## **その2 C J関係者が結びつき、お互いに磨きあう場への参画**

- C J関係者が自らの価値に気づくには他者との交流・共創の場が重要であり、「官民連携プラットフォーム」の役割に期待
- 令和3年に新体制となった同PFでは、当面の間、「食・食文化」をハブとした活動を展開。食・食文化と他の様々なC J分野とのマッチングが行われ、交流・共創の場となりうる
- 同PFの「地域プロデューサー」や「アンバサダー」などの再編強化により、地域の魅力の掘り起こしやマッチング、対外的な情報発信に努めていく
- 同PFの継続的な取組により、C J関係者の結びつきを強固にし、切磋琢磨が行われることを期待

## **その3 ファン・コミュニティの形成による体験・感動の共有**

- SNS等を通じてファンによるコミュニティが形成される動きがあり、C J分野でもその取組が多数ある
- 当該コミュニティは、C Jの商品だけでなく、その背後にある価値・理念に共感することで強い結びつきができている
  - ・例えば、日本の食は、心身を健康にするとの価値を前面に打ち出してはどうか
- C J関係者と当該コミュニティとの間で、同じ体験・感動を共有することでさらに結びつきが強くなり、広く海外へと輪を拡げることができるようになる
  - ・例えば、日本にいる外国人がコミュニティのメンバー等となれば、これ

を起点に海外へと輪が広がっていく

- ・さらに、グローバルにビジネスを展開するには、世界のラグジュアリー層をコミュニティに取り込むことも有効

○今後、官民連携プラットフォーム等を通じ、CJ 分野における各種コミュニティを横断的に支援していく

◎CJ 関係者には、3つの手法で自らの価値を磨き上げ、アフターコロナに向けた準備を進めていくことを期待

### (3) CJ 戦略の再構築に関する取組（※関係省庁の施策のフォローアップ）

- ①価値観の変化への対応
- ②輸出とインバウンドの好循環の構築
- ③デジタル技術を活用した新たなビジネスモデルの確立
- ④発信力
- ⑤CJ を支える基盤

### (4) まとめ

○2025 年大阪・関西万博は CJ にとっても絶好のチャンス

- ・同万博では、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、「未来社会の実験場」として、観光・食・文化、健康・医療、科学技術等の分野での共創・連携や、実証・発信を行うことになっている

○CJ の総力結集を図り、日本の魅力を世界に向けて発信していく

- ・例えば、日本の先端技術と食の分野が融合することで、地球規模の課題の解決につながるとアピールしてはどうか

○また、政府が進めるデジタル田園都市国家構想は、デジタルの力で持続可能な地域社会を目指すものであり、CJ との親和性が高く、両者の連携を強固にすべき